明星抄

榊

花散里　六

賢木

巻名詠并歌源二十二歳の九月より二十四歳乃春
まで三ケ年の事あり

秋好中宮也

秋の宮の御ことり

秋の文群行九月十六日御ぶくおろす也

おりとの表　　夢とのうせ給ひ
こそ源氏の夢ものがたり　　世人の
世人の心ありてうとみそて行をいとり
高貴の内ゆゑ　　聖ゆゑふくのる也
まことにうとし
ゆゑを悔てなりとりとゝひそて行也

尊経閣文庫
貴重図書

よろづの表
訳うひて
をひきり仕例は
例は用ざる仕物語の例也仕まづ例もとたな
それびとはうきり　花村上の法女紀子女王天延
三ねん科家下向ばゞ家女法微子重明親王女相具下向
足とれもらるる
えいめ弘りん
人の乞つきあり
朱　殘いとやをもあり也
をとゝ氏蔭うい

時く濃り弘る
たるとのたゝ和弘る
うりやをく
ひきあにあるる
院のとおろ〳〵き
仕卷の末り当　桐壺の帝法物也
水月ちるとりなれい
へき也朱　舞行時節又数をるへ
立ものうと
いてやとい
かとゝんとものう也
引奇よ及べうずとうく世角
朱　殘をのうとうとあるい

十六日殺家ぐり弘
白銀すてもと連てやされし

夜きをいでやゐの大めさにて
はるばるばるばるの野面
拍子をうつと
えて源を待ち地
拍子者もしてえ　遊女ども　踊
琴の者に嵐の松風ものすごしとなめ
秋宵女流琴を奏して　の方也　通ひて面白
十人おまりどりとりむ也
十人ばかり　立ちれざり
今まで立ちうさるつん
つ居ると地
拍子れをする小柴垣　遊女の出る也
大嘗會の垣を業して　搦手　延喜式よみ

潔齋の心地　朱うりをする何はも　穢氣
時は拙却せんの心地　内裏ふ火ぐを用ひあ
あるり〳〵　そこ〳〵と走るる地
〳〵〳〵
かんつさ　弁慶地
ひさや　義経　あり　丹　分明
ゑのい弁慶の用なる〳〵　火炬　小人二人　山伏
葛野郡　秦氏の童女を取る由　延喜式　弁
供なと出てむる　丹元
ものこゝ　内〳〵の方也　面八皆弁慶なれ
あうひいこのやめて　よ丹羽りそのこも

わかものの者ども
あつまりたる也　深の羽也
いさやこの人百も　はしたの色
みなかさんする　紫色なれ共さん色也
いろどり
うつきかつらの色　うきうめ色なれどえうけ
たれ共ぬぎかつぎる也
こなすいすのこえうれ　深の羽也
うつうめ色を　青色のかつらにうさぎを榊
の色うつりをせてうあり
花ゴセン　撥撰　ハヤフル　撥弥がき心の榊なれ共毎に色も

うつりかはり　河ぶく　毎に色もうつる榊
葉うつりをやいん人のとめてきうん
いつよ理もさえ行るに　ちりやうの弥れぐれ
もこえあ〜今の者男の行きもの
弥ヒカミ　植い　はしたの者也ことうう雑ゼツ　雑物者也
紙いろいろ月山ものこうつひきる也榊なる門
の者ものまませて　弱ある人なあ〜と云へ
れ云ありぶらりぶざりうう也いろ海ぐんてとは
ぶうう人てやなどの云也
をとめよう　榊葉れ番をうつをとめれい
やそぼ人もまうるせうきり

たるのあらひ
ゆうり海をせく
人のきてひさ海よ
きてひばまに行ゆき
みゆり道行と道
いるそやきすあうて
るゆり米田ゆうりゆうゆうの心地
めつゝきはゝひめれ
ゆうり移ゆく行地
月をへめるるや
さゝあるゆ月とあるゝにあゝり

弟子なれい悔ある様地
源の心地
人ゝは甚不地
池の音になり行
はゝ程中行ゝる気な
ちるゆるはゝ和おゝ花やゝに

こゝら　多ゝの心地そゝゝとゝそ地てなゝて
いゆゝゝ
つゝさゆきえぬゝゝ
ぬゝき也 朱無限也 甚不地
又成空也
やゝゝとて
されゝゝて
後ゝのゝゝんたゝ
朔夕の霧なあゝ
すゝと有をゝ
道のゝゝすゆの
はゝ不の拍子地
清話
はゝぐゝを治定也行
はゝのひゝゝと地
蓼巷ゝ廃ゝゝ
ゝゝゝを其ゝゝ乃俊ゝん
聖人記事ゝき地

うきはなし　以テノほかことわりまゐれたし
暁の　涼の字也此つてりほか指する曙の光
さびしさ此句も君に待つ身を此の内の云せや
まてしばし　朱　暁のなかりまじくは白露の
おきてさとひしき別をまじや　君之
ましてまりなれ　家のつてりもしらるやう
なる所あくいつまで秀逸もおのづまとさせ
家者も殿さ此云之　朱　案よお六癒ス下東坡も
云り花るにうく此あり
大空の　此暑者の字也此別は吾云うて
所すて継り共秋の感ありにかして云給

なり別の悲しみは云ざ所而にし花る
みは所なんぞそうり
梅しきるす
を云り世所みそうやうの別も出来ぬれ　涼の字也此頃ちえくあれし
と殺梅ある也
いかえうり此所まそう　さうぬくの字也
此くつ身よりも　涼よりの文也
男は此しるを　草子俺也
こひのさうそく　色く涼より綴ひ殺也
殺をくなるまじに　此くぶり此をくある也
歌ころは　秋好也

ふちやう　不定

遊人はまのなさるゝと　釈源て下ゆかるゝ

何ゝも人は　世間の人は数と成てさ迷

ゐきつきてうゝさ也一向数なるゝ為はやすゝ

物しばは是ゝ何ゝも人よゝぬけ出る人なゝ

をけ源のゝ為ゝ此為の眼ゝ也

桂河　西河は櫻也　朱花　秋文群行の日

西川幄の屋まて中臣祓とゝ

ゝ長ゝ

花るにゝゝ

群行の日は前と勅使とゝ河原迄供奉て

飯盛ゝ長奉道使ゝ伊勢まて供奉しゝ

ゝ源の時ゝ場屋ゝ事なくゝ下ゝの

中を奏ゝ中務ゝ云系議ゝ間一人殺ゝ

院のゝ所ゝ　飯盛の院の御

門ゝ前ゝ　ゝ

例のつきゝ　ゝ

けまくゝ　是ゝ所の方ゝ海くゝ

さんゝゝゝれゝ多くゝ世ゝ

掛畏　カケニクモカシコケレトモ　宣命　ゝ

なゝ御ゝ

ゝ

ゝ

の紙也

神宮寺八幡宮

国津彦ハ地祇と申し山祇と
申て山づとと称し地祇一切の祇といたんこあ
伊弉冊尊生淡路伊豫筑紫壹岐薩摩隠
岐佐渡次生大日本豊秋津洲謂之大八洲
ありよくまもるふ　そもそもあるめとも
いとさりきれるれと　こるいれ是ふ乃
ふ逸事也

家礼ふと　神文の ふ逸る也
女子別書　神文の別書花　延喜式にみしり
今の世ふる流家開白家なとに別書礼ふ
とそあ

くにつ祇　ゐ紙さりとくいちるの祇を
すへきと也　二条流之芸法の法海を云也
つまくになるあ
家の ふ逸の　ふ逸ふ礼ふと云り朱神ふる礼
ふ逸ふ礼ふ形きき也
逸のまくり　ぞすへ原の ふむぐ礼也
ぞすへ原の ふむぐ礼也
いとけなる礼ふ形を　ふ逸ふにうちそひく
あるまくぐ礼神ふを言りのすてふる
き礼をと也
世ふ礼ふあるれハ　みる逸ふるもの

べきと云ふ事也ばかの源のうつを書り給へ
ひみてこゝにあり
こゝみえたり
はるかにこゝに　　法皇の御ぶんえあり
ある也但御節不審あり幼雅とゝ云ものゝ今秋
文十四也同輿の式めりと云ふ作り但法
物はかはよりなぶ朱物をあくるを切也
又物こゝの　　はるかの文長のるゝ仕人を
乗所ありと云ふ作り物を云ふけざる秋之
同輿りて内ふ云ふ作る時のるゝ参
の事と也

廿四日　　年記す花るよ祥なり
朱花　はるかに十六りて故文ふ云ふ作十七あに
て屋ごく燈好中家をまりけ作ものあに
坊ふ文形也作りふ源十二のをけるを也朱雀
路の立坊い源氏四男の時也云ふ御おに高文
書り作りふ坊と申也保明太子小一條
院をの例也
そのうをを　　今日い孩云ふ有よ何ものも
出さんとすれど也ものきをこはるかの事
ふ御作也
日れのはて　　花るに有朱京北面を海り

尺とれりと云ふ事　天皇大極殿高御座の
東北隅に箱に入る様をとり出して称する
額に付して東北方に懸る事あり
八省　大極殿の事也　朱雀門の外に八省院あり
禁の内省察也　察をば明察にてみぐりあるべ
殿上人　殿上人をば昇殿人と云ふ
ちり出る　申の時内裏に参り給ひ
小時剣の事　輪りの事
二条院より　二条院のそば近き事なり
けだかく　けだかく

ありすてゝ
すゝめ　ぬれゝず　ぬれずとあれども せよめれども
わ道地来八十瀬の　俗る所
ことゝそゝて
袁なるを　袁の中の道也
けだ高　けだ高の作道のあてれなく
ゆと地方を　ゆと地方をさゝ
ゆるを　海辺寄
尺乳母地
けの　岳のこと
まして　袁のそら
院の作なり

春宮も一つにて　行幸と一度にて御座
しかれど他日なる也
朱 可云李部王記云延喜御門宸後御藥之間春宮
朱雀院 七歳御時御舅貞信公（左大臣）為御供参
内主上御對面之間有五ケ條之仰一者可専神
事二者可仕法皇三者可聞左大臣訓四者可哀
古人其外五ケ條御忘却春宮御退出之時左大臣
被奉問之
法皇の御事
なお心をかく
法皇御さたれ也
東宮いとけなくおはします

中宮は洞　后宮也
よろづのことを　延喜の法門家後の法皇の名
李部王記河海にありたるにみえたり
をも抱えがたし　后宮の法皇也 朱 へたいまふも中
家ならへし例あり
此家は法皇尊ん　春宮此御事也
かられさせ給ひぬ　太后の事り給はざりしとき
りかされ給ふ也
法位を　脱屣の後よ政をし給ふは嵯峨天
皇法例也 朱 後くの世には連綿也
おわちおく　二条太政大臣之弘徽殿にて

朱花
二条右大臣任相國越引入左大臣元慶四三月
基經公任相國越左大臣源融此例也
きさらつのまつりの
日　河云服着物也朱本義の花は
花はて　孝子也
て縁辺る布也素服より用布比義とらて
昔男月とて十三百著して今脱也又載麻と
て麻布と用る僧の着る所也衣は佛の法服
也素服支仁明天皇兼和七年盤鰐狩可尋
こそこそと　七月の夕也
ほのかに　第十一并夕雪也
はの四十九日　可七夜后ら也ら板仕勢　おもつ

波あれのこ海さるこ高氏中のこ
ちるすれたるのて　七月日のる也
ちるの世中　雪霰のそ也
大きさ記　可呂后為人剛毅史記
家の二条家
兵つ人ら文　第十二の花壺の見る也
ちをのろ　龍比私也
海に杉やうに　人くらりに行ら
ちく未河　杉の高の樹也
さえわる　あの中りに行むさる事也
あの面よ志づく花の也さめるにもの奇此面氣

ありて西の方 朱河云大和物語亭子院おて
兼盛（モリ） 池に花もみぢ散るなごりの浪にく新み
一夏の夕ぐれの
ありすまのくに 第四段也
とくとくて 高貴寺の二月まつみ
遠ば鳴りかと聞かるとあり
そのつのて 見とも第四段記者の筆也
おきさ家にうりて 三条家也
山里をみ
ありさて皆時（ザンシ）の雲住とあり
れよ春を地 今の兵人のやうにて夢をに迷

源中三也 朱 遠ばるなりとい
ちりくの山 花
諒闇（リャウアン）の頃也
市をあくも 今引人とけるるさまの也
門前零落（ラクノアン）鞍馬（バ）鞍（ヒキ）琵琶引
法門のまり 二条院の頃也
このあるよく袋 三ケの一也
今ちりいくこそ
ちてきて かもてうりこひ歌く也
院の山ひよやそあ 勝月歌
内侍のこ尼（アマ）ちり有人 院の山ひるに
其頃よ今は

勝月院内侍のつみよりの御所也

石の墨うちよ　弘徽殿の大石と大唐墨ぐらに

おくりまゐらせ月花のはなの木梅壺を用給也

さう給よ弘徽殿うしの内侍のつぼねに給

登花殿　登花殿（トウクワデン）い弘徽殿ぐらも奥もも

れうあつけ弘徽殿いくれうの殿と花の琉璃（チリ）に

浬（ウモ）てうの也とうくめ何ぶくれの方なりへ

凝花舎（ケウクワシヤ）梅壺（朱河）也弘徽殿登花殿以上石町（キヤキマチ）西殿

女御等曹（サウシ）司也

ゆかのうちみん　源の寮（ミツ）通のつぼ也

よくゆえ　今はたはうの宮めのつぼ也

例のはくも　源氏かくれ給へるよりのち

めぐりも也

殿のはつえ　月のはの殿の院の門のはんうけで

かりぬをとりて　おもはせ給ふ所のはるかそら

しるよう也

人をうらはあ世ものうさに　七月なれ給へる

世のうさと也

月のおかいの月

こ姫君を　養子也

河ひのよりて源氏よ宣給ふ也

朱雀院うれ帝（ミカド）色有

はくはせ世市をとりそくく　大臣

蓑とたとへたる也弘徽殿のまとなりそんそん
うむさうるひとの所の瀧綾文選そゝ是ハ文選
西都賦上ニ瀧綾而棲金爵とあり殿閣の角を云
也云の御ゝりゝ殿ハ朱瀧綾そゝ〳〵ゝ
そのゝそるはゝりこゝろる也そゝ〳〵きにあ
れあやまれり
かゝりおきはおわえの　　右流の出仕
しるすもこゝ〳〵てみるゝ〳〵よ陸奥〳〵
今ハさも侍らはゝりしはふゝの蓑なる也
朱源を院のおゝ〳〵めゝ〳〵はのる也
ひゝひとゝ　　兵ゝの文とのかゝやすゝ

ぞゝ〳〵ゝ也朱　私云はふゝのゝふ野〳〵てむゝひ脇
也ゝかゝをいかゝるゝ〳〵他脇ゝ河云ゝ面脇ゝる也ゝ
ひゝ物語　　右ゝ物語ゝゝ海ゝ　住吉物語
女院ハはゝ〳〵にて
巻ゝ后脇の女ゝ文ゝ院ゝ
朱桐壺帝ゝ三宮女也ゝ勘楫齊院ハ桐壺の后ゝ
也ゝれゝ法服ゝ〳〵ゝ服ゝ
ゝ日ゝゝゝゝゝゝゝ
ものゝゝゝゝゝゝゝ　　ゝゝゝゝゝゝゝ
也　ゝゝ院ゝ式云　若無内親王者
依世次簡定諸女王ト之花　此物語の延喜己

従事例ヨリ引てそれより以後のてゝ以今代ニ
書なせり孫王の母院ヨリ当代ヨリ穆子女王真
子女王の外以従の例ヲ記故ヨリ多もの也と云也
大和の云　源の仁ヶ所ヨリ母まゝ也
うすちゝ　母院ヨリ如此
ゆねに書つれ　母院のつゝひ所女房也
昔にうゝ　源代事也院のほうゝ所ヨリ也
みてゝ流のはゆいこん　源氏のはゆいこんてゝ
みゝ所ヨリ也いまゝ海ヨリ也ヨリ
不ヨリ云にまりて所のトはまゝ今ヨリ也ヨリ
きて也こゝ也ヨリ　なゝひゝ方ヨリ

を付まゝきゝ也兼平は門の大弦急れ
べゝ弦ヨリ人ヨリ也ヨリ急にまゝ也
はゝ下ゝ人ヨリ記ヨリ御ヨリ
也見ヨリ給ヨリ　史記云孝恵為人仁弱
ヨリ　弘徽殿の又大臣
ゝ所ヨリ　ゝ所ヨリ二ヨリ
ゝんの云　勝月東の云源にてまゝ也
五ゝんのゝそヨリ
中壇御室必御参也　ゝ源ヨリ源の事ヨリ也
の音ヨリえゝるヨリ　弘徽殿ヨリ
中殿云の云　勝月東の女房源のひゝ

源のけんじ弟子也
御ぐしちかなる中
けぶ様神宮に
朝夕ふしをがみ給へふ
御りうなるかな
こゝにけんもつよかるゝ
ちかるゝ
花
西宮大納言云宿ト并
事大なる以下かゝる以上宿侯
のたまはるゝ紙勅の宣にあはせ給へ
ゆゑかゝ
ゆゑを思ふ
こゝぎこゝたれこゝ
さぶめて
ケりうゝ原と源のこゝ
たりうゝ原と源のこゝ
ちかるゝ
近衛司の人ゝ
ちかるゝ
ゆゑ
ゆゑ

之中至其上蹟所申之殿上及宿所等也若大將侯御前
令次將殿上人申宿申官人侯由即大將於弘
場殿及便所令申在立與奪初問多曾申仰云與之其音微々也
北山羽林抄云宿申亥子時左陣毎朝夜行也
寅刻右陣勤之丑刻物部一人申宿申侯由殿上及宿所尋上蹟次將在所申之
今案宿申近衛其夜大將次將内ゝ
この并ゝる上首の人ゝ所を引て申也
にくも又直戸ゝそを戸也
時ゝ先申ゝ
とゝ
ちゝと
ゝ

中おねもこれは同じ・今は相模よりつるを海つ
さきにうくうくうくられあるあれんそれをこの
井申の近侍人よりそくられてそれまりにく
こえ泥くるをおねきて行る也・この故よりまま
ものづりきとはうまり・寅一八右近の翁ア
也・この時源氏も太ちねなれいきてぐるーよ
とおり・みこ次将よ告ぐてき事ある源氏を海司の
みこ物ものー傷人の源氏はこれ弁行る
すにあんとそをる人をーをこれりやと
源の字ひ行也・源の身まはらぬるな
ものをゆくるきて也

ゆく　只今寅一と告行るにりてあ行と
をもるをとり・ぬるとをを厭みよせて流りされ
かくく独をぬすといえり
なけさけく　ひのあくと人よあくとを流人厭開
こりあいくてたくつまきて也
兼香屋　多ぎ今朱雀の女院今上の母
とりのゆね　ひのぐ申　乃申ねのの刻
おねみて移くれ異本朱　みの明石巻に太宮
とみしこりのぐ也みてこの文也
りてこれ也
放蚕の此事也　秋よつまのまり
ますれよをのつくとのひるるもなれと

ゆたのまくまくらうくしきみる立ゆ
ゆくさとも
内よまいり給うん　　菊重の事　源のゆ悦も
いさゝか菊重　　古歌いはゆ源のれいもさろ
しめさゞ給し薄をもち此菊をよけ所のもみしらり
明たてよきれと　　源氏の年ひらせしらゆう
みかれゝる花也
人のをうまいりて　　くゝさげくゝめりる
はをありて　　此氣此のゝりゝる也
菊重　　菊重のゝ弟ゝ為ゆ中文の文ゝ
くゝりめゝん　　源のゝ家にゝりおゝ

ますとゝ菊重ゆ　　菊ゝさゝ
文まして　　藤重の文独ヒトリゴトよのゝ
れいてゝゝう　　世やつきぬんとも
世やつゆめん
あゝざりし源のりゝ源りゝ世やつきぬん
はやきめん　樹下集ゲ花
すゝ此ひのはを不　　はゝを人ゝ所菊
重の文ゝ所すぐさむゝきゝす也と所
さすに　　源の何ゝさすに菊重の出来ゆ
とまるゆまで給なゝ文此出ゆの也
せあてゝゝの　　源ゝ也

なのめなりとこそに　まことの法也
あるをとられて　弁とまこと命婦と也
世中にありとやしめさしたん　源の詞
あつまの事の　源の中将やどそうせ行るんとある
羽をいて猶りぬとおきてあづらはまぢぶ
きをもつと物おもふる也
はかりごとにすこそ　はかりごとそのうとも也
あつまの世の　人ふる岩壺の男に源氏の恨を
ゆるしてる也をあつて源氏ふるまつ元つまと也
世にふれて　世よりあれだらきそれ海されみのう
の岩ふるけみちあつまなしてん　岩ふるけた

あつまのてんのひりての行つる也
はあるを　はあるを
家と其あるを
あはきさたのうきまつきさに　岩壺の文
院の大后をけうて岩壺と中文ふそ行
あつをそのこと行を今はさやうの事行と
あつこあ行すもありてんと恐怖ある也
院のおりの行也　中文の位うつる
もなたみてゆ　中文にそ行　其をるも
あつうり行世のうたさ行より
威夫人のうきんめ　威（キヤフジン）
妙よ行すをりの行は

人しらぬ家の名の威まゝの如くよ
こそあるべきことゝ人ゝ思へられなるべきもの也
朱 此段悉史記を以て書也 高祖ハ桐壺大后
呂太后朱雀ハ惠帝ハ比也
そむくさのん事を
はをとりにも 行啓 出家あるべきさま也
御ふみあるべきこと
あいうう 善悪の沙汰也
はらんせそうん 發菫の善悪へりさ
あ〳〵和歌
或人やうにや 或人とて事のたりる人あ

まこと 朱 髮落りそうる也それもり見
じゝきとはさげ見也
いそきさかなり給りん 何さやうに成給へ
きそと善悪やそを
いゝひさうる人き 給ひてのたる也
まあたり給て 給ひてきとる也
そうれ出泉を 善悪也
女すてこそ 源よ能似給也
むのきすふ 如なりて也
を也白圭之玷尚可磨 毛詩 源よ似給へるを撰よ也
あをといと遊うう
發菫こ

あさまーきれたるの
のたなり　　花蓋よりひろをきん

雲林院　　何海序淳和離宮也紫式部墓
雲林院白毫院之南小野篁之墓之西也宇治
宝蔵日記ハ　ふるに雲林院ありたるみちう
ちに紅葉ありと面白きあなたへ俺人のも
きて立るをみて遍照の後伝ある也
こなたに家を不のれせうと　相蓋の立花なる也
あちこにいとせあり　面白き語也
をーあをうの　ちりををーあけ立花
月みるうきくしりて立ーうきを

なるやとあり　何とそうそむき
果さるやと也　花うり文の翻也世代
行とれ也めくき
のぐれなやのたる也
きたりうとなりて　清文の事なるへ
みちれくふこと　檀紙也
あさちの乃　歩むさ立ありて面白
一条院より東門院へまのれ立る也源
の志ぶたるさあーにのせうう
倒なるぬるすりく咲てはぐーはろ行方
日ー東門院中文とーけるを射つるーける

あさらの氏寺の中りに気をそてりを望める事を過て
風ふけい　女房の音曲を清茅が末ふうふさて
ぐふくとあり気うえる心未の頃より式部
吹かの風もを吹きて　式院より　槿　式院
繁氏を紀海りなする所也
宋河　雲林院は法華堂也仍て式院より近きと也
中将の差り　槿　式院の女房也
けまくえ　式院なる所よりをまる所也
と也そのこと氏秋とい朝ぐ者りはは繁巻
に音信(ネトヅレ)を結ぶ　縁切りはゆるとは必いけと
ゆきれた昔おかゆるの心也　槿　てまり弱ぐ

せ事あまた秋り弱(ミ)おるより也今い式院
ゆまだうひるの紀より也
音を今ふと　いの一の宮のをぐまれ
遠音とにをすりの式院より成(立イ)弱ぐ
さ紀ふさりとりとこのこ弱事也
とり申(さまえ)　とりあ寄ふとがやの心也
あさみとりの紙　槿(花)は濃るに仮ある色
中将まきをとおくて　中将の差氏遠り
物まの中氏をりは　式院より未(ユフ)綿の
ぬさ一に書給
そのこと　お氏奇そのこと氏秋りかゆと

御法をとゞめて積置なり　引歌未勘也八千返世云
ちり紀世みとそ
たひも知らぬと云心也　弟子の能也
さりなをとゞりう　顔(容)の色はよせたり
まして朝かほも　弥陀の輝(ハヂリ)こき年(コザ)をも出て
おそろしや
此比よりと云義也
あやうやしの趣　新文殊院いへ連ぬと
同し様よ云はくしなり弥陀の輝にあら
うすなれい弥をとらめしうと云心也御所の趣
の浜花見笑めるの朱あ倒しさやうの趣なり

あし我一様の趣と云也
よりありおれさい　是より弟子の能也
院もかくなるそあらぬ　院ハ新院の心也院
とまハめうつしきるの也
すらしあいなる事ありし　宮まそ弟子
比之つ連あくてもそ行しく時しむさくの
法遊あ法ハ御倒しきて弾もる也
六千巻とい文　あんさて作しさるうとある
も此天台(テンダイ)の六千巻の事なるへし
玄義(ゲンギ)文句(モンク)止観(シクハン)　本書也各十巻也
尺籖(シヤクセン)疏記(シヨキ)弘決(クケツ)　末書(マツシヨ)各十巻

人ひとり　ものゝこと
きゝあるひと人　　兵部卿宮人也　朱　きゝあるは　離古
人と乘あるゝ人と也　　賜者なれば也
ゝゝるさゝの車
朱　西宮抄云車服公卿乘黒延車
女房の月比の　　雲林院より御ぶしの時の也
世中いとあんと　　源氏よりて源氏時
ふあひゝ後とあ　　とゝ人はなり
あいなく紅の　　源氏のきゝくゝる也
色ゝゝとあるゝ　　あれはゝとの也　　の色に
ゝゝるあさぢゝ霧に　　ゝゝるさゝゝにとあり　　ゝ

はゝ人のに　　三条院のはゝ
ありかつゝるゝさも　　いまゝゝ菊壺ゝゝを後世
きゝあり也
家にまゝゝ也
いゝ也ゝゝ　　菊壺中宮也
ゝまゝゝ　　ゝゝゝの羽也　春宮
ゝまゝゝゝゝ
家ゝあひゝさのゝ　　はゝ寺に行ゝ中宮
きゝゝの月ゝゝ　　ゝゝゝゝゝゝゝゝ
をゝゝひゝつとめん　　ゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ日数を破りて出ん　　ゝゝゝゝゝ
ゝゝさゝゝ　　袍の緋の也　　ゝゝ人なる

くて苔むす奥山に花紅葉にうもれ鶯のなき
ありふるて　はるの機嫌うらうらと花咲
新しくなり　源氏文也
まひのいさうなる　源のうすの話也
あてこまりひやり　不意ひやりなさんゆうりかともゆ
ゆうりなくい　若菜の巻事
大さうれうなる文のはしに
などの実(ヒキ)めなる文也返事をしる也
さとひらこて　源の文也
何なりもうしろ　今文よりそにこんもんへ見
そむくさとて　源りはの

海そ行ふ　花散里
海そ行ふ月を初てまりはの也
まり内のはうこに　朱雀院へ参る也
はうこちも院よ　朱雀院古流り絵の話
かうみりあられと　源氏古流よ似ふよと
朱雀院ものぶ　なに(タイ)ふ古流のはり
をとむ行迎
うんの文氏はの事
中文のこうひ
退出(タイシュツ)あるづをとうんと也ようにはて
あてん自はは迎みとうさりを作出れ

春壺の春文より三番文へ
海そ行ふ月を初てまりはの也
朱雀院へ参る也
朱雀院古流り絵の話
源氏古流よ似ふよと
なに(タイ)ふ古流のはり

花門乃はの也
源の羽也中文氏若菜より

てんあをぐ[illegible]よん遮てけ[illegible]さるこ
春宮を今のみこよ　勅宣に朱雀院のけ[illegible]
けしきのよしけ遣言あるこ
とりまはく　はひり[illegible]めさそひ
なきよしを　春宮を[illegible]義しけ
もけ[illegible]もて　[illegible]の面を
何ゆもはつくしめぬ
こ[illegible]ゆ[illegible]よとも
大[illegible]しけ[illegible]
大宮のけせうと
きこえ[illegible]

たゝ[illegible]立ゝ[illegible]
白虹日をつらぬきり
上書詞也文選みも[illegible]
なり立まゝきる[illegible]
[illegible]代へ[illegible]
史記列伝六荊軻傳云荊軻者衛人也中略之燕
太子丹質於秦秦王之遇丹不善故丹恐而亡歸
飯而求為報秦王者國小力不能中略有間秦將樊
於期得罪於秦王亡之燕太子受之舍中略荊軻知
太子不忍乃遂私見樊於期曰中略今聞購將軍首
金千斤邑万家中略願得將軍之首以獻秦王々々

以奇の立留也
史記并漢書鄒陽傳
[illegible]の面也
[illegible]の弘徽殿こ[illegible]
面代の如[illegible]

必喜而見臣臣左手把其袖右手揕其匈然則將
軍之仇報而燕見陵之愧除矣中畧樊於期中畧曰
此臣之日夜切齒腐心也乃今得聞教遂自剄太子
聞之馳往伏屍而哭極哀中畧遂咸樊於期首函封
之中畧乃裝為遣荊卿燕國有勇士秦舞陽畧為
副中畧遂至秦持千金之資幣物厚遺秦王寵臣
中庶子蒙嘉々為先言於秦中畧秦王聞之大喜乃
朝服設九賓見燕使者咸陽宮荊軽奉樊於期
頭函而秦舞陽奉地圖逓以次進至階秦舞陽色
變振恐群臣怪之荊軽顧笑舞陽前謝曰北蕃蠻
夷之鄙人未嘗見天子故振慴願大王少假借之使
得畢使於前秦王謂軽曰取舞陽所持地圖軽既
取圖奏之秦王發圖々窮而匕首見因左手把秦
王之袖而右手持匕首揕之未至身秦王驚自引而
起袖絶拔劒々長操其室時惶急劍堅故不可立拔
荊軽逐秦王々々環柱而走群臣皆愕卒起不意盡
失其度而秦法群臣侍殿上者不得持尺寸之兵中畧
方急卒不及召下兵以故荊軽乃逐秦王而卒惶急
無以擊軽而以手共擲之是取侍醫以其所奉藥囊
提荊軽也秦王方環柱走卒惶急不知所為左右乃
曰王負劒々々遂拔以擊荊軽斷其左股荊軽廢乃
引其匕首以擿秦王不中中銅柱秦王復擊軽々被

八創軻自知事不就倚柱而笑箕倨以罵曰事所以
不成者以欲生劫之必得約契以報太子也於是左右
既前殺軻正義曰燕太子云左手提其胷秦王曰今
日之事從子計耳乞聽琴而死召姬人鼓琴琴壱
日羅縠單衣可裂而絶八尺屏風可超而越鹿
盧之劍可負而拔王於是奪袖超屏風走之
かう　たてうう　けいけいの　ゆ　ゆ
ゆあにさつひて　ゆ　ゆへ　源の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
未　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
月　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
くとゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

みゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
源の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
月　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
をの　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
すみも　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
と　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
節の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
の　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
一　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
まゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ
ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

いて給まて　ゆ
也今ゆ文ひさまを久給つきとあ月もゆ
一へ義海さんなりへ
うめ　きに　　書文
くんの文ふも　　はつ（ハツ）まりて書ふる也
ふ報の　　源の義ふなるをお指（ユビサシ）に也ふ
朱
ふ報の仮ふ文つけて月を給ーのひなり
あるうちふ也ひうきたつん　源ひやり給
書ふも　　勝月取ふ給（ヒキ）すれふ人
なれなり
れなり　いづくりでと皆ひあも

文殊　源也
殺なるぬ分のこ地うく
ふりてまふ仮くまでに成よきるる
こるのさりこそゆきをまろく給ふなり
けるふ也
あひこすて　けふの時毎（シタ）だりゆそハる
也ごるさの源（ナミダ）也そふるなるべ　ふる
の姿此時毎ますてふなる紀
ふ此ふよふふは　　義る也首引ふる紀
けは五段ふ文
いふなるあの文も　　引ふ有つきふ赤（ダ）勅紀

けん舟の文月の元良　八人の座のそこにう
よんだやあも阪もそこにこがれ　花はます
きてもなくいろかとも
はたれしゆるん　　見送りの舟
こまやうんなりあもり　えうちをすて
まもてはさまはは　　はは
ものやうにはとろ
あくとばしあるあ多あるべはまどう
ちはゆるも
院のはたそ　一周忌也
はは八講　中宮へ也

中宮へ也
きこしめ
まれす　　雲井もりみよもり
たはるく　　はは四忌なれる也
あるく

今日まてあるもうけまで
もなくてそ其世よあるもも今日
ハ忌はるも也　　向ありろ
すちりり

いまあきハ一どあるは曲
なれこのあるが何もとまる歌はは是
ハ極楽とみてより来あるは也ろ
ものやうにくらきかとん

人々とは　人々は異なる也
今日八これ所なるも　今は放棄の儀事なる
源のそひきりて古院をとりあつめ行
中宮は八講なり　一勅にて毎年定まる
るゆゑあるも
ちす　供養し仏を養ひまつる経
をつむ也
光常の儀也
五巻の日　第三日　菊の御ぞなる日也
世はてまーさ　人々弘徽殿参りたるの
はぐらをもわきまれてまゐる也

つ物よりのーとの
そその日まゐるをを　放棄ありの御ぞのるを
みこハおのこれ所よ　中宮は乳の御よりぐ
ろさて立給也
ひつよりありーろさ海　音人々宮さまーく
さるれどもひづよくーを三位ーをの行也
はをちの接ぬれ傷部　中宮はとぢ
こ院のみこーち　中宮の法服よりあるる
ここ寺ち也
昔はあさ海　東院中宮ちのよ行
しかあるもるる也

いろやうに　たねの羽
今はじめて　中文蒔蒔のあてるし
始さらさ　人々おさらぐらせ行よ
ろりそ　ぬみぐれめぐべりしと也
ぬみぐれめて　山羽ぬ殊なりそうぐが
なでぬあれ也
ますれ内の白ひ　はぬ蔵の内れ宮焼也
ぬやうかのきり　見いますの内りあ蒔也
ぬさ紙ぬんあ　ぬ法るものあるぬますれ
ぬの事
の行ぬ法　或ア　やうにいなどの行ぬ

を中家れ今ぬひ出ぬ行て嬉ぐぬ行也
はぬ法よさも　中家の法ぬ義也
たれそそそそ人　出将のをはりて出也
ますを行
月のすむ　源氏ぬ物をけていい世中れす
ふはあぬ愛中家れ出家ぬ行て物利天上
などの屋ありとも天ぬてをぬ行乃
やぬ情がさぬ人と也　これ世のやぬと未
文のはるぬうひぬとうみさぬ人
たぬの　歯云なぬ法也ぬの法ぬ影の嬉い
世れ行ぬ汁ぬ出家ぬうぬ也ぬ行にぐり

にそむかしぬでたきものハさやうにまじらせ
いろまじきてとそあるべき候ハ真實の心
あるは之家光の御時代　光孝代内のことつゞき
よ恋しくて雲代八重ふるハ候らしの也
かけかこりて　川ふ上良人朱又ふ代ふかなれ
かたくいれつかひの　菊の花也
度ませも　二条殿之御室の方へも法成寺殿
母父をとくに　古筆も此中宮をとこれ能筆
ふと作ありし　抱きとせ也
きと此法経まて　中宮まし禅適しあらんと也
あかしあるす　義日ひとりかしなてはあるも

ありすと云細りて下見ん　尼のたゞなと志って
今ハくはし方代さまの
めでまいらせ候也
ふりくひてきんも　さうくしやと云まで
菊子能之記者の筆也
まりなも今ハ　源代ふる君すもとは
あるまじきことに
とりしめて　源の心
まをとゝりめれと　源女守之
内海り花やうに　古筆源圀たてゝ
むかしかりし　源代をさうふのこと

高砂うちのとうに　三条家歌
あをる計　白髪(フラムヘ)なる計(バカリ)ハ今も中家(ヒクキ)也
むさしのゝかいとのに　二条の右府の詠方
朱　二条の殿〳〵はせ給ふ　二条の家よりむさしのゝ
ちとせ　みんなもつゝ川て　源のとゝ家より詠ハ嫁よ
一人(ヒトリ)商(ムラウゼン)ゝとも云詠(ヨミ)　さゝ也
むさしもゝ　あまていたんこめ也
換撰(ゴセン)　言に中詠ハ　詠(ヨミ)ハ　ゝ
あまてハすゝ　ゝ
なあ　源　　奥(オク)つゝに佛(ホトケ)をすゝ
ゝ　ゝ

年(ネン)　ゝ詠ゝ　中家の詠　ゝ
なゝ　海之面白さ　中さ海也
あり　世(ヨ)　　上原の家より詠をゝ
所(ムラ)　ゝ　浦　ゝ　源氏
の　詠　詠　ゝ　浦　詠
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　朱　詠云
ゝ　浦　浦　ゝ　所(ムラ)　ゝ
ゝ　浦　詠　ゝ　詠(カヘ)　ゝ
ゝ　世　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　浦　ゝ　ゝ　ゝ
世　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

さもこそひなく　　藤中納言殿を初めとして
何よつもりてか　　古院の法皇の有ごとく人々
おいざりに公今毎日物忌ひのあさまに
しかも又一人うづひなくとかめらる也
つゝさめ　　家あるくい言葉陳日をもはして
いつれも朱雀遍院法皇義日家宣陳日なる人
しゝろとうて　　ものゝ中とうりけ次第
の朝りけ家のつゝさめとあるそれはけ和
よはやつゝさめと申されいめけ理運よりる
家へ又喜孔付る家宣計をいめけらるや
朝夕この毎日　　家勇にとりてかゝ階をべ

きこ勞ある人々と中家よ強云ある人を
大結日それ加よかゝ階なゞもせざるこ時乃
中家は強こそ家つゝ式あまりなるとこ結也
はたりたり　　こゝの年爵をいゝ院の法
給も日々也　　法皇院殿も中家職
くてもいつそ
の間家るもなる記をこしすせてらりるる
九のゝこの也法対なと不可設この左しる
どれへ乃家とよつゝさる也　一部
はたりて　　中家のはゝ
人家寸　　言家のはゝ勇にこずあるを佛

よ念じ申さるゝ也　源の氏方の人も加給ふれ
け屋の人も　源の氏方の人も加給ふれ
法人なれども也　蒙こと文也　左大臣良世例
たのもしゝ也　おれ組清懐云条融院受禅の時更振改け例
むをゝとゝ
殺仕の事　花る紙をもて殺用ゝ
曲禮上大夫七十而致事　注致其掌所之事
於君而告老若不得謝則賜几杖懸車年先
祖廟車懸也
いまゝいゝひとゝそうのゝ　二条の右大臣の一族

ばりなるゝ也
はゝとゝ　右大臣長光のゝる也
三位中納言　蒙こと文也
けゝひの法さめ　三位の中おれるゝ
四の条　二条の御おゝ光る也
とゝひ出れとゝや　三位中納言今中納言みる第
をあるべきをゝ也
春秋のゝゝゝやう　二条の清濁経の私の作
ゝる例のゝ今私の源氏也一位光源の
約束なり蒙中なるべゝ定まれるゝ
世中はゝまゝりき　世の私讒言あるゝ

夜の雨　　西行法師家集

めづらしき和集　　韻ふるばの用

花太にこまとりて　　対座より勢座をとる也

いとこよなきはさえ　　源の方学をとり

つゆよ太まもとにくり　　三位中将まつけ方也

中ねのはまもとはすめて　　紅梅なり

四条はるの二郎

知りえとに　　紅梅の部

三条のおとゝ北の御殿なれば也

まひうちみれ　　源のさうまこ

あるまゝりのを　　多賀の七夕の方ひる表也

中ねはらけまり　　三位中将敬とり給

それもかて　　中ねの方也　　紅梅の部

はるかいとゝ　　源の方也

はるもの薔薇とこそ　　花とりをこそひるとこ

はとゝ古今　　紅梅の部にさうびをまいをさうひ

ふづくると　　源の方也

はなして　　源も家也　　同

也　　朱はるあいざろ　　家　　をよはして

らうらく　　はるの部

はるあり　　紅梅の部

紀貫の筆こんくの方なり

をは二首のかみ　　中とあざろをとり

つゆきうらさめ　　はるもの部不山家こと

うつゝの内の中などにてよめる哥はすなはちかさ
ねたる文字も物也かさねしとくへからざれはなり
をとこうせんするなるべし
いさめさうる事　さう事はたゝしくかうなすけ
さし花院のごとくなるがいさめとかう切てかう
なと続つきしいうしとかなえさりさてふれは
かぞ一方にそひなびなる也
みなけるすを　清源をためし給ふすもの也とし
文王の子　源も自奢（ミヅカラオゴリ）給也文（ブン）王（ワウ）とぶ桐無（キリナ）し
比し武（ブ）王を朱雀院よ比し源の吉男を周公（シウコウ）
旦（タン）よりいしての給也

成王のなみとり　家は紀若の翁也　周公旦の翁
也成（セイ）王（ワウ）の叔（シュク）父（チ）とある也家は冷泉院も浄化は
升也かくれるすあれふりて成王の家の
吉次男を何とらの給ごとと云也花為院は太子の
孫と見えたり
無名の家も　紫上の父也帥（ソツ）宮とあるなりありの宮（ホウ）
の無名の家也いろまても無害（キガイ）死
その比みんの為　勝月秋里ニ出給也　朱　叢曰完
名りしたる　名りの三字織んの為氏公の紀伝
后の家も　弘徽殿太后也
后のきんさう　二条の太后氏来（キ）舞（ダチ）也

まれ家にたてる

村雨の　弘徽殿女御

降るとはなしに　ながめくらしつる

中将の君の　中将の君の

光源氏の　光源氏の

たのもし　夢とのみ

つれなき　源の御方

こゝろも　こゝろ

くれまどふ　くれまどふ

やうなる　やうなる

たゞ人に　こゝろ

源の御方をなげきあ

荒れくるひ給ふと

みゆるもうとましく

けきをれ計りて

朱雀院

思ひ

ひきをれ

源氏

朱雀院

源氏

源の御方

荒れくるひ給ふ

みゆるもうとましく

ひきをれ計りて

朱雀院

思ひ

ひきをれ

源氏

朱雀院

源氏

源の御方

三　弁職（シヨク）をすぐいつかなりそと分をしらぬ事ハ云ハ
つゝとそつゝとも也　　大石也
家いゝゝしき　　内門（ウチ）なりとも何ともいハざる時ハ（ジセツ）
みゝゝ字ゆれと
と弘徽殿の述懐（ノベクワイ）の詞也
これゝゝの坊也　　朱雀院の事を云て也
一時の事也
おとうとの源氏
又此事を　　二条のおゝゝもたゝめ源をもとこ
おとるつきなうに
ひよせのあ所と也　　ひよせるゝゝ源
なれもゝあやゝとやハ有りけり　　と義曰
勝の日の始（ハジメ）に曲（ゴト）をとゝめをせぎゝて新（アラタ）源
ゆをまいゝすべきなりとうに皆ゝ
果（ダ）て源の芸ハ
をとゝ行あ有りて大石のゝ所也
みなのれゝとひそひそ
行と服（ハラ）ゝ所也　　源氏ゝゝゝ
そのかいゝゝ
まいゝせ所へと也　　源の狀（リヤウジヤウ）なれ所にて内ハ
ありひゝをとゝ　　朱内侍のゝを女房ゝと
いそゝるゝにて

さりゝ孫さきなるゝ人の　けんの系れるすい
はまく世るれ人のりてあるゝ所れよいに
ぐみてこみてこ
志のて表えのいる方に　くんの系れをを信の
ゝ行みすり
秋後のはすい　源ん吉効ををこりこれ詩院
みてこみまゝ世行す必あるこきと地
義家の世代　義家の世代をいそぐ云地
さすに　二条太后のこ
さられ志りこのす　太后は外服立所ゆ
出行するをゝゝい振舞也朱　けすりしゝ行し

箋曰　白虹貫日の語勝なるゝ　太子丹田光
先生謀曰此事触泄云り
のまへて　勝のこんあまゝ行なるゝ　朱箋曰
けん一向ゝんの系れすにるゝきゝ
つまぎきの羽ゝて勝負に出しゝ
うゝゝみせの　けんの系をを制しみ原
をまてに数例ゝきゝ地朱　けん一向に
の系れすゝ源ゝ本あゝ今れ数例ゝぎに
あゝぎ書むもあの事ゝみゝいゝゝりてゝを
行ゝ行ゝ一向源れすい地ゝよ及ぶぶゝる地
このつのてよ　左迂のすゝぎなるゝ

花散里

巻ノ名哥によせて号之也　源氏廿四歳五月比事
也賢木巻の末を同し年なれハ也されハ六月
まてハ遠乃事あるやうなれハ也又六月比とミゆれハ巻
の次第賢木巻の末よりはまへと見えたり
人ま又也
　　　とハ源の亡勝月故前坊妻の事に
ことはにてつけし給ふ也
大かたの世につけてもまつりしく
らめきとりなどかえしつる給ふとり
　　　　とハ白虹貫日とつ
まひけいてん
の事をいひ出さんとめ也
　　　桐壺の御時乃女御之也花散里

ほかとうしと　花散里のこと也源氏逢ひ給ふ人也
のこる事なく　此花散里の事なども思ひ忘れ
給ふをも喉えて何やかやと折気におぼしつゞけ給ふ
ぞりはいひ出給ふ世の有様にもよほし給ふ也
さやかなる　ちひさき家也
あつまにしらべて　和琴也
ゆゝしけれ　車よりおりをさうし給ふ也
そひとめつる給ひし　此家も維光が宿なれど給ひ
給ひし家なるべし　此比時の御随身又手給ふ也
なるべし巻よりも過ぎしとある　巻の時の歌なるべし
御車をしりへさせて　門のまへを押あけさせ也

ぞありける　かのかひとりすれどかよ
ひ給ひしと云所みしより朱雀なるべし也かのかる
らひけるとかのよ云のあるも也
さまくも　惟光も又内の女も等にこゝろ
字余なり也
かゝき次　内よりものあけはして此時分いだし
こさとし源氏のうへかりし故よりあおぼつかな
とよみ也
をのかふける　空おぼれをするとゆる也
うへしかき孫も　惟光もたびうるよりおり
むちあはし逢氏撰ともぎり合てうへし給

孫も云々凡そ
人道あり　うちの女の子也今すこし金
うもと弱るゝ也
はもつむつま　惟之の也はかなく同
いぎり　あるよりあとゝ云ひくとさも
惟之う定ものが道　こゝ所を女の孫くさは
引ゝ給はけり
つゝのめせち
ひゝ人ゝ源氏の君の孫の
たうけ　ひゝ人也　侍従
はゝ孫いとまなく
大家のひをあ　光も源氏の
あるこゝろのる也

重月を
をとづれ　ふるうて人の孫ひとゝなる也
孫のの
なるの月はもゝ
ひ　ゝ
すれくれやうなる
孫を今ゝ孫也
ありつゝうゝ
ろき中ざ海也
いゝに出りてう
出りてう　明石の
ゝ　ゝ

ゝる　ゝ人ゝ　ゝ　ゝに　ゝ
ゝ　ゝ人の孫ひとゝなる也
まひけひぞんのゝ
月の　ゝ　ゝ海
相撲の　孫　ゝ　ゝ
中ゝの　孫　ゝ　ゝ孫ゝ切り
ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

こちはかの　梅の香をなつかしき時あかつきり
ひとつ　ふところぞぬぬ　梅の花散里に
梅ひなかは時あるとはませんりも
古哥二首を見合せらる哥也是ぞ思ふより
いかしへの　源氏女流へ中納物也念やうに流物語
中せいぜいのなぐさめのもあり。語を云ひ此寺
事もなき也　朱郢近ガ斧乃如く伯牙ガ琴ノごとく
むかしひかりけまでは物語も無曲也
こよなうまさりて事も数そふるも　古哥
を語てなぐさみなりはかなくさもぐすそのと
おかしきの世よ去てさる　源はあるところ

し給ふさんへ昔此なはなく給をましてか女流
色々やうにそましますはさもそとなをりそ
かりて中納也
ひとはにとりなす世
朱箋云源の流さ海を見給て此女流の云申也
女流の心の申也
へあまく　当意をあらはしますなる事也
女御の哥也
さいそこ　古院の流時は此女御などいふ文字
くとなきは聞わりしを今の代にはなやうの
人も書れぬことぞ也
にしありて　花散里の後給らぬ也

つるさも立ぬへしと
けれのと絶(ダエ)とは
ありけるとかく云ふて
墨はとめたい
偽(イツハリ)いるまゝきて花義
墨はとめたひ
源のこゝろさのこ
うたをもこゝろうたりい
あしきこゝろなりと
源氏こゝろをする
にくまるゝなり
花義墨こゝろ
恨ずしてある人
絶ぬ恨ざる人
こゝろ井氏のどゝ
うるべきいはも
墨一人をみこゝろ
それをあひなすこと
と絶のこゝろをあひ

あとをたゞりする人なる
みこゝろ氏世のこゝろと
御みこゝろとこゝろ氏あ所人
きこ源の性(ショウ)をこゝろ
ありつる

中川の宮氏

五路